交流文化

立教大学観光学部編集

2012.
volume
12

12 交流文化

特集「観光」の可能性

特集
「観光」の可能性

立教大学観光学部

交流文化　12　©2012
立教大学観光学部

ISBN 978-4-9902598-8-4

交流文化 12

立教大学観光学部編集　表紙写真／須永和博、毛谷村英治

CONTENTS

特集
02 「観光」の可能性

04 震災と観光
震災復興にみる観光の強さと弱さ
佐野浩祥

14 資本の論理に抗する観光
タイ北部のコミュニティ・ベース・ツーリズムから展望する観光の可能性
須永和博

22 プロプアー・ツーリズムの可能性
チリにおける「スラム観光」から考える
内藤順子

34 「交流文化」フィールドノート⑫
Amusement Parks in Denmark and Germany
毛谷村研究室

40 読書案内
『津浪と村』
『観光と環境の社会学』

42 最近の講演会から
震災の経験を伝え、生かす――宮城県観光の復興へ
クイーンズランド（オーストラリア）の観光

45 学部国際交流の現場から
協力大学との連携による短期海外プログラム
言語と文化現地研修（タイ、ハワイ）
マラヤ大学の学生、新座キャンパスを訪問

［特集］

「観光」の可能性

観光が二一世紀のリーディング産業になると言われて久しい。観光による経済活性化への期待には依然として大きいものがあるが、観光がもつ多面的な意義や効果への認識を深めることにより、観光には狭義の経済的効果を越える多様でさらなる可能性を見出すことができるだろう。本号では、東日本大震災の経験、世界システムの中で周辺化される人々の取り組み、そして貧困削減と南北問題解決への試みを通して観光のもつ社会的意味とその可能性の広がりについて考えてみたい。

ナムトック・メースリン国立公園（タイ王国・メーホンソン県）にあるプイ山（Doi Pui）山頂からの眺め。プイ山麓の村から先住民族カレンのローカル・ガイドを伴えば、山頂でキャンプもできる（p.14参照）。

壊滅的な被害を受けた南三陸町中心街

震災と観光

震災復興にみる観光の強さと弱さ

文・写真 佐野浩祥

東日本大地震を経験した私たちにとって
災害に備える地域づくりは重要な課題だ。
災害後の緊急措置、復旧、復興、防災・減災において、
観光はどんな役割を果たすことができるのか。
被災地の視察を通して観光の可能性を考える。

観光をとらえなおす契機としての東日本大震災

東日本大震災では、１０００年に一度と言われる地震と津波に直撃され、我々は多くの犠牲を払うこととなった。この悲劇を前に、自然の前に人間は無力だ、という諦観にとらわれるのか、あるいは、二度と同じ過ちは繰り返さないように前進するのか、我々の決意が試されている。地震大国であるわが国は、どこにいてもいつ大地震に見舞われるかわからない。大災害に備える地域づくりという視点は、今後ますます重要になってくる。その際、考えるべきポイントはいくつもある。災害が発生した際の緊急措置、被災後の復旧、復興、そして何よりも重要なのは、災害を未然に防ぐための防災・減災という考え方だ。東日本大震災を経験した我々にとって、こうした観点から観光が果たす役割について考えることには、大きな意味がある。

私はこれまで数度、大地震によって被災した観光地を視察する機会があった。２００７年３月25日の能登半島地震、２００７年７月16日の新潟県中越沖地震、そして２０１１年３月11日の東日本大震災である。前の二者は、東日本大震災ほどの犠牲者は出さなかったが、地域に与えたインパクトは大きかった。観光地が大地震によって被るダメージは、相当のものがある。文化財や宿泊施設などハードの破損、公共交通機関の停止、風評などによる来客数の低下による経済的な損失は大きい。このような観光地の負の側面ばかりがメディアに取り上げられ、「観光は震災に弱い」という見方が定説化している。しかし、本当にそうであろうか。ここで言われている「弱さ」とは、経済的側面に偏重した観光の見方によるものではないだろうか。実際に被災した観光地の視察から私が感じたのは、むしろ観光地の「強さ」のようなものであった。本稿では、その「強さ」とは何なのかについて私なりに解釈していくことで、観光の可能性を考えてみたい。

震災の現場に赴いて感じたこと

能登地震が発生した1か月後、私は同僚の先生方と、当該地域の観光地の被害状況の視察に赴いた。まだまだ復旧工事も始まったばかりで、それこそ防災の専門家が調査に行っていたような時期だった。正直に言うと、そんな時期に私が行って、何ができるのだろうかと、気乗りしなかった。現地に到着するまでの車中、私はどのような気持ちで現地を歩き、どのような写真を撮影すべきなのか、逡巡していた。

しかし、実際に観光地や観光施設へ足を踏み入れてみると、当然思い描いていたような凄惨な光景が目に飛び込んできたのだが、その周囲には何事もなかったような静かな海と青い空が広がっていた。その強烈なコントラストのせいか、そこにはなぜか悲壮感が感じられなかった。人間が自然に勝てる訳がないという諦めの境地なのだろうか。いや、そこにいる人間に悲壮感を感じなかったのだ。震度6強で被災の大きかった輪島市と旧門前町をはじめ、七尾市、珠洲市、志賀町、能都町、穴水町には人がいて、彼らの表情は疲労の色こそ多少見られたけれども、決して絶望してはいない、生気に満ちたものに見えた。

震災時の救援・復旧と観光

能登、中越、三陸、それぞれの被災地では、観光は被災住民の支援に役立っていた。

まず、能登においては、輪島市内の国民宿舎やリゾートホテルは、被災者の避難場所となっていた。同じく輪島市内のビジネスホテ

1 壊滅的被害を受けた南三陸町志津川全景
2 避難所としての役割を果たした国民宿舎輪島荘（能登）
3 救援拠点となる道の駅（能登・道下サンセットパーク）
4 救援ボランティアを輸送する観光バス（能登）

ルは、被災者へ浴場を無料開放していた。道の駅は、災害ボランティアの活動拠点になっていた。観光バスは、ボランティアの輸送手段となっていた。海水浴場の広大な駐車場は、被災した家屋などの瓦礫集積所となっていた。多くの観光施設が、被災した住民の生活を下支えする役割を担っていたのである。

また、視察へ行った2007年4月11日は、輪島の朝市が再開した日であった。朝早く出かけると、かなりのにぎわいを見せていた。再開初日ということで、多くの報道陣が目についたが、それ以上に、店と客の境がわからないような、渾然一体とした地域コミュニティがそこにあった。被災した瞬間から不自由な生活を強いられてきた住民が、これまでのストレスを一気に発散するように、そこには会話と買い物による笑顔が満ち溢れていた。震災による避難生活という非日常が、日常としての朝市の再開を要求したのかもしれない。

中越では、能登同様、道の駅が災害ボランティアの拠点となっていた他、仮設住宅の敷地になっていた。海水浴場は、自衛隊の活動拠点となっていた。海浜公園には、仮設テントが張られ、粗大ゴミの集積所となっていた。

そして、三陸である。その被害は、前述の震災の比ではない。特に大きな被害を受けた宮城県南三陸町では、地域の基幹的宿泊施設である南三陸ホテル観洋が大きな役割を果たしていた。15mほどの津波が押し寄せ、町をまるごと飲み込まれた南三陸町の中で、10階建のホテル観洋は2階部分まで浸水し、電気・水道などのライフラインが遮断された。それでも、被災直後から災害ボランティアの活動拠点、救援物資の供給拠点として機能し、1か月後には、復旧関係者の宿泊場所としてホテルを開放した。従業員の雇用も維持した。1か月半後には、復旧支援で町を訪れた人や避難所にいる地元住民にも息抜きに来てほしいとレストラン営業を再開。5月5日からは、いまだ水道が復旧しない中で、自ら町に申し出て、被災住民の集団避難先として、約600人を受け入れたが、その避難住民に、女将である阿部憲子氏は「生徒や学生を持つ家庭、町内での再建を目指す商店主」という条件をつけ、優先的に受け入れたのである。それは、女将の町の復旧・復興に対する思いからであった。

当時、町は仮設住宅整備の遅れから、被災者の町外避難へ踏み切り、約1400人が隣の登米市や山形県に避難することとなっていた。被災住民の生活のためには仕方のない措置であったが、女将はこうした動きを「南三陸町の人口流出」と深刻に受け止めた。周りを見ると、震災を機に、都市部へ出て行ってしまう若者が目立ったという。つまり、この人口流出は、必ずしも一時的な避難ではない、というのが女将の認識だった。震災前でも少なかった1万7千人あまりの人口がさらに減少し、特に若者が町を出てしまっては、町の復旧・復興はままならない。ライフラインが不完全なままでも復旧関係者や地域住民に宿泊施設を開放したのは、町の将来を案じた女将の町の復興に向けた強い意志の現れであった。同ホテルは、現在も被災者の避難所として機能しているほか、部屋の一室に東京の学生を呼んで寺子屋を運営したり、古書の

1

2

3

4

5

6

1 本来活況のはずの海水浴場（中越・柏崎市鯨波海水浴場）　**2** 海岸部に集積する瓦礫群（柏崎市）　**3** 粗大ゴミの集積所と化した海水浴場（能登・増穂浦）　**4** 道の駅の駐車場が仮設住宅の敷地に（中越・道の駅風の丘）　**5** 自衛隊の拠点となった柏崎マリーナ（中越）　**6** 再開初日の輪島朝市（2007年4月11日）

1 南三陸ホテル観洋ロビーに設けられた図書コーナー　2 夜を徹して復旧作業が進められる加賀屋（和倉温泉）　3 南三陸ホテル観洋の一室で開催される内職講習会

寄贈を受けて図書館を開設したり、各種イベントを開催したりと、市街地がまるごとなくなってしまった南三陸町の中で、地域コミュニティの核として大きな役割を果たしている。

震災復興における観光

震災からの復興においても、観光は重要な役割を果たしている。

4年前の能登半島地震で、和倉温泉では物理的な被害に加え、いわゆる風評被害も受けた。和倉温泉で最大規模を誇る旅館の加賀屋では、複数の高層建物の繋ぎ目部分に被害が出た。中でもスプリンクラーが故障したことによって、絨毯やカーテン等が水浸しになり、休業を余儀なくされた。しかし、従業員は日頃の防災訓練の甲斐もあって、淡々と業務をこなし、現場に大きな混乱はなかったため同旅館の小田会長は、社員を前に1か月後の営業再開を宣言した。観光施設の他、多くの民家が倒壊しており、土木建設作業員も不足していた中にあって、「加賀屋が元気にならなければ、能登が元気にならない」と、自宅の修繕すら後回しにして加賀屋再開に尽力した地元の作業員も少なくなかったという。筆者自身、震災直後の和倉温泉に宿泊したが、夜になり静寂に包まれるはずの温泉街の中で、煌々と照明が焚かれ、作業員たちの打ち鳴らす金属音が錚々と響いていたことを印象深く思い出す。

さらに小田会長は社員の前で「禍転じて福となす」とも言ったという。すでに加賀屋は「日本一の旅館」という称号を手にしていたが、震災での休業を機に、従業員のサービスやホスピタリティの磨き上げを図るため客室係の再研修、東京の高級日本料理店への調理師の派遣などを実施した。2007年4月28日の営業再開の前日には、和倉温泉へのアクセス道である能登有料道路が迂回路の整備によって復旧し、同年のゴールデンウィークおよび5月の宿泊実績は前年を上回ったという。

同じく能登半島の輪島市黒島集落は、震源地に近いこともあり、和倉温泉以上に大きな被害を受けた。黒島はかつて北前船交易を背景に栄えた漁村で、現在の美しいまち並みも往時の繁栄によって形作られている。しかし、地震によって地区内にある286棟の建物のうち、約3分の1が全半壊状態となった。黒島は、震災前から、集落の少子高齢化や人口流出、空家の増加といった問題を抱えた、いわゆる限界集落であった。震災によってこれらの問題にはさらに拍車がかかり、集落存亡の危機を招いたのである。「先祖から受け継いできた町がなくなってしまうかもしれない」という危機意識は、地元住民を復興まちづくりへと突き動かした。まち並みを復元し、賑わいを取り戻そうと、「黒島地区まちづくり協議会」（川端一人会長）を発足させ、地元主体によるまち並み保全型のまちづくりがスタートした。協議会を中心に、各種住宅再建支援事業を活用しつつ、黒島の歴史的景観に配慮した復興を進める中で、伝統的建造物群保存地区制度の活用が目指されることとなった。住民や行政、外部のコンサルタントや大学との協働による調査が進められ、2009年6月30日には、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。その後、再生したまち並みの活用へ向けて、2010年4月には、金沢工業大学谷明彦研究室（都市計画）の協力のもと、観光客用の「まち歩きマップ」や「地区案内板」が設置されている。2011年8月には、黒島で最も遅くまで北前船主を務めた家で、黒島に住む人々のシンボルであった角海家が復元され、文化財として公開されるに至った。現在、協議会は「黒島地区まちなみ保存会」に改称され、18人体制で、先の角海家の運営の他、今後の活動に向けた協議を行っているところである。ただ、保存会メンバーの数名は、今後への不安を隠さない。筆者の聞き取りによれば、重伝建地区の指定に向けて支援してくれていた外部機関は、指定後には徐々に離れていき、保存会は現在自律的に活動することが求められているというが、実際のところどのような活動を行うべきかについては、多くの戸惑いがあるという。

そして、東日本大震災の被災地、南三陸町。震災から1年近くが経過したところで、まだ復興への道のりは遠い。ただ、南三陸ホテル観洋の活躍の例があったように、その未来は明るいように見える。

震災前から南三陸町の観光振興に携わっていた東北地域環境研究室の志賀秀一氏は、南三陸は外部の人と交流する力が強いという。その証拠が、市町村に直接寄せられた義援金の額である。震災から2か月の段階で、100万円台にとどまっている自治体もある一方で、南三陸町へは4億4千万円の直接支援が寄せられた。宮城県内では、仙台市に次ぐ額である。なぜ、南三陸町のような小さな町に、巨額の支援が集まったのか。この理由を志賀氏は、震災前から日常的に外部とつながってきた、ネットワークによるものだと

4 自らの被災経験を語る語り部（三陸・第6回福興市）　5 第6回福興市のにぎわい（三陸）

主張する。

例えば、町内で魚屋を営む山内氏は、十数年前から東京の早稲田商店会との交流を続けてきた。その早稲田商店会の中心メンバーであり、阪神・淡路大震災で被災した経験をもつ藤村望洋氏が、２００８年に全国18地区に及ぶ「ぼうさい朝市ネットワーク」という商店街ネットワークを立ち上げた際、山内氏の店を含む南三陸町のおさかな通り商店街もそのメンバーとなっていたのである。南三陸町では、震災の翌月29日・30日には、地元商業を奮い立たせようと、山内氏が中心となって第1回「福興市」と称されるイベントが開催された。「福興市」では、震災前に観光でにぎわっていた商店街を取り戻そうと、テントでの特産品の販売や、踊りや音楽ライブが行われた。その際、人や商品の提供において大きな役割を果たしたのが、「ぼうさい朝市ネットワーク」の全国商店街の仲間であった。その後も、毎月最終日曜日に「福興市」は開催され、その度に規模が拡大し、第5回の来場者数は2万人に及ぶなど、毎回活況を呈している。筆者も9月25日に開催された第6回「福興市」に参加したが、数か所に及ぶ駐車場はほぼ満車であり、出店者と会場を訪れる客には笑顔があふれていた。駐車場で車のナンバープレートを確認したところ、9割方の客は地元宮城県民であったと思われる。つまり、そこで展開されている光景は、純粋な観光現象というよりは、観光的な枠組みの中で繰り広げられた地域住民同士の交歓であったと考えられる。被災者が「語り部」となり、その被災経験を地域の次世代へ伝える魂のリレーであったといえるだろう。しかし一方で、旅行会社もボランティアツアーのような復興支援のための商品造成に力を入れているが、近畿日本ツーリストは「福興市」を組み入れた旅行商品を首都圏で販売し、多くの観光客を南三陸町に送っている。

この他、町長の持つネットワークによって南三陸町には多くの支援の手が差し伸べられたし、震災前の南三陸町を観光で訪れ、その自然や人に惹かれた南三陸ファンが様々な形で震災復興に貢献しようとしている。南三陸

上 被災した黒島の町並み
下 修築され重伝建地区に指定された黒島の町並み

との縁のある外資系企業が、町内に新規工場建設を計画する動きすらあるようだ。

復興まちづくりにおける観光

以上、筆者が訪れた被災観光地の事例を紹介してきたが、観光地は地域によって様々な役割を担っていた。被災直後の観光地においては、地域住民の命・生活を守るため、観光は様々な場面で、まさに縁の下の力持ちとしての役割を果たしていた。そして、被災地の復興段階においても、確かに観光は一定の役割を果たし得る。ただし、観光を、復興への救世主的存在としてとらえるのは、無理があろう。結局のところ、現地をまわった限り、能登半島地震から4年半後の今、震災を機にドラスティックに変化した観光地は能登にはないし、今後も、震災を機に新しく生まれ変わるような観光地は出てこないだろう。黒島が良い例である。代々継承されてきたあの美しいまち並みが被災しているのを外部の人間が見たら、何とか元通りにしたい、と思うのが人情である。そのために、外部の専門家が国の文化財保護政策のレールに乗せる段階まで、黒島を支援したことは十分理解できる。ただ、外部の力はそこまでである。もっと本質的な部分、あの美しいまち並みの中で、どのように住民が生活し、これからの展望をどう描くのかは、結局のところ住民自身が決めざるを得ないのである。今、黒島のまちづくりが停滞しているのは、限界集落だからではない。震災に遭遇してはじめて、住民がようやく重い腰を挙げたところ、急に事が進んでいってしまったために、「まちづくり」が住民を置いて一人歩きしてしまったのだ。黒島の住民は、まちづくりを自分たちの手に取り戻す必要があるだろう。一方で、南三陸町の事例は多くの示唆を与えてくれる。震災という非常時において、震災以前から続く外部とのネットワークが大きな支援をもたらしたのである。日常における人と人とのつながりが、復興へと後押ししている。このつながりは、非常時における黒島の外部との協働とは全く異なる、日常における外部との互助的なつながり、「困ったときはお互い様」の関係である。こうした関係は、被災したからといって即時に構築できるものではなく、長年の時をかけた信頼関係である。これは今回被災していない地域においても、防災・減災という意味において、重要な視点と思われる。

観光の役割と可能性は、その状況によって様々である。観光とは、いわば人と人の関係、あるいは人と自然の関係における構造契機である。震災に遭ったから観光で町を立て直そう、といった安直な発想は避けなければならない。震災の有無にかかわらず、日々のまちづくりの中で住民によって観光が真剣に議論されてこそ、観光はその役割を果たし得る。１００年先を見据えたまちづくりの中で、観光を語ることが必要だ。

被災したチリ地震津波の記念碑（南三陸町松原公園）

タイ北西部のメーホンソン県、ナムトック・メースリン国立公園内に位置するH村。
観光客との交流を楽しむH村の人々

資本の論理に抗する観光

タイ北部のコミュニティ・ベース・ツーリズムから展望する観光の可能性

文・写真 須永和博

国際政治や経済の表舞台に立つことのない「小さな共同体」の生活文化はその周辺性ゆえに商品化を余儀なくされてきた。観光は彼らの自律性を奪う存在でしかないのか。タイ北部の山地民カレンの事例から考える。

文化的差異を前提に成り立つ観光には一つのアイロニーが存在している。つまり、国際政治や経済のなかでは決して表舞台になることのない、世界システムの周辺に生きている人々の土地や生活文化がその周辺性ゆえに商品化されるということだ。そしてその生活文化の商品化は、往々にして当人たちの思惑とは無関係な形で進行するため、観光のまなざしを注がれた人々は、資本の論理とマスメディアが作りだすステレオタイプな表象が充満している観光の波に呑まれ、自律性を奪われ、資本主義システムとしての観光やそれが作りだす表象に従属することを余儀なくされてきた。

では、世界システムの周辺に生きている「小さな共同体」の人々にとり、観光は自分たちの自律性を奪う存在でしかないのであろうか。こうした問いは「『観光』の可能性」というタイトルがつけられた本号には、甚だ不釣り合いかもしれない。しかし、「『観光』の可能性」を論じるためには、これまで観光がもたらして来た様々な問題にも十分自覚的であることが必要であろう。

本小論では、観光が「小さな共同体」にもたらしてきた問題を踏まえた上で、「小さな共同体」の人々にとっての観光の可能性について考えてみたい。従来的な観光開発が「小さな共同体」の人々の自律性を奪ってきたとすれば、ここで私たちが考えるべきことは、

世界システムの周辺に生きている人々が自律性を保持しながら観光に関わっていくことは、いかにして可能かという点であろう。

以下では、コミュニティ・ベース・ツーリズム（以下、CBT）に取り組むタイ北部の山地民カレンの人々の実践から、上記のような問題について考えてみたい。

対抗的文化運動としてのCBT

タイ北西部のメーホンソン県、ナムトック・メースリン国立公園内に位置しているH村は、人口30世帯弱の小さなカレンの村である。この村では、1997年以来、地元のNGOやツアー会社などと協働で、CBTを運営している。北タイで最初にCBTが導入された村としても知られ、周辺の山地民集落がCBTを始める際のモデルともなってきた。

この村では、住民のほぼ全世帯が焼畑耕作に従事している。しかし、タイでは本来、国立公園内の焼畑耕作は違法であるため、正式な土地権はなく、地元の国立公園局とのインフォーマルな合意によって黙認されているにすぎない。しかし、数世代にも渡って焼畑耕作に従事してきたにも関わらず、H村の周辺の森は豊かだ。様々な野生動物、自生している数々のランなど豊かな生態系が維持されている。

タイでは、従来、山地民の行なう焼畑が森林破壊の元凶とされてきた。しかし、山地民のなかでも特にカレンの人々が伝統的に行なってきた焼畑は、一定のサイクルで耕作・休閑を繰り返すことで、必ずしも森林破壊に直結しないという主張が、NGOやカレン自身によっても声高に叫ばれるようになってきている。こうしたなか、持続可能な資源管理を可能にしてきたカレンの「在地の知恵」を外部に発信していく気運も高まっている。このような背景がH村におけるCBT導入の背景となっている。つまり、焼畑をはじめとする様々な慣習的実践とそれを支える「在地の知恵」を外部者に伝達する手段としてCBTが導入されたのである。

観光客はH村に到着すると、まず村の観光案内所で村の歴史などの簡単な説明を受けた後、「ホスト・ファミリー」と「ローカル・ガイド」を紹介される。観光客は村滞在中、ローカル・ガイドの案内で、村内や周辺の焼畑や森へ出かけ、カレンの様々な生業を見学・体験する。特に、焼畑はH村の最も主要な観光資源の一つとなっている。焼畑には陸稲の他、多種多様な野菜やハーブなどが植えられている。観光客は、稲のそばに実っている様々な野菜を探し、その場で収穫した野菜類はその日の夕食に供される。

観光客を焼畑へ案内した際、ローカル・ガイドは、「焼畑＝森林破壊」というタイ国内の一般的な焼畑イメージに対し、自給用に多様な作物を栽培するカレンの焼畑は、さまざまな在来品種の多様性が保全されており生態学的な価値を持っていること、短期耕作・長期休閑を繰り返すことで、周辺の森林を保全してきたことなど、カレンの焼畑の持続可能性や森とカレンのローカルな歴史などについて流暢に語る。

ここで注目すべきは、ローカル・ガイドとなるカレンの多くが、「森林保護」「在来品種」「多様性」といった環境主義のイディオムを用いて、自分たちの慣習について語るという点である。言い換えれば、カレンの人々は、慣習的行為を環境主義の言説に翻訳した上で、観光客に提示しているのである。カレンの人々は森林破壊の元凶と見なされてきた焼畑を逆に環境主義の言説と節合させることで、タイ社会の中で支配的な焼畑・山地民言説への対抗言説を構築しているのである。言い換えれば、H村のカレンの人々は、観光という場を戦略的な自己表象のスペース、すなわち対抗的文化運動のアリーナとして練り上げてきたのである（須永2010）。

観光のモーラル・エコノミー
――ドイ・インタノン国立公園におけるコミュニティ・リゾート

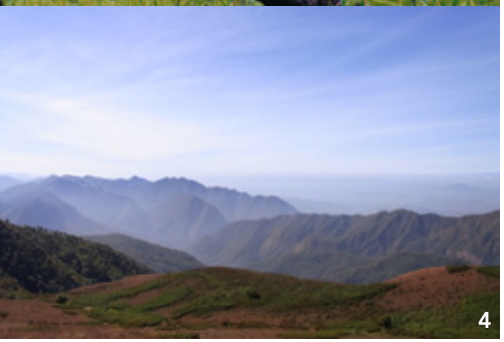
次に紹介するタイ最高峰インタノン山麓に位置するP村は、かつて梅棹忠夫が『東南アジア紀行』のなかで「桃源郷」と称した村で

H村の焼畑

1

2

3


4

1 H村の概観　2 村びとが中心になって作成したH村の案内図
3 焼畑を案内するローカル・ガイド　4 H村から2時間ほど山道を登った場所にあるプイ山（Doi Pui）山頂からの眺め。H村のローカル・ガイドを伴えば、キャンプもをすることもできる。

もある。しかし、今日年間50万人が訪れるドイ・インタノン国立公園内に位置しているP村は、もはや梅棹が訪れたときのような「桃源郷」の雰囲気はない。かつて行なわれていた焼畑も国立公園に指定された1970年代に禁止され、それ以来P村の住民は水田による自給米栽培と生花や高原野菜などの換金作物栽培が主たる生業としている。特に、山地の商品作物栽培の推進・普及を目指す王立農業プロジェクトの拠点でもあるため、これまで数々の換金作物栽培を試してきた。それゆえ同じカレンであっても、P村の生業形態はH村とはだいぶ異なっている。

この村では2005年からCBTが運営されている。CBT導入当時は、北タイで最も有名な国立公園内にありながらも、山頂へとつながる舗装道路からは離れていたため、P村を訪れる観光客はほとんどいなかった。しかし、同国立公園は映画の撮影舞台になるなど、タイ国内のマスメディアで紹介されることも多く、タイ人観光客を中心に訪問者数が激増していた。P村へ観光の波が押し寄せるのも時間の問題であった。こうしたなか「コミュニティのメンバーが共同で観光を運営することで、生活の場を守る」という目的で、NGOなどのサポードなどを受けつつCBTを導入したのである。しかし、その運営手法の面では、H村とは大きな違いがある。P村では原則としてのホームステイは受け入れておらず、観光客は村に1棟あるコミュニティ・リゾート（定員10名）に宿泊する。そのため、P村が

1 村の暮らしを体験する観光客　2 野鍛冶の風景。村の鍛冶師が作るナイフは観光客向けにも売られている。3 機織りを体験する観光客

受け入れることが出来るのは1日1組のツーリストのみである。

このコミュニティ・リゾートは、P村内の20世帯ほどの住民で共同運営されている。1年に1回、収支決算を行い、収益はメンバー内で分配している（ただし収益の10％は村落開発基金として利用されている）。ちなみに2010年度の世帯あたりの分配額は約5000バーツほどであった（1バーツ＝約3円）。このように各世帯に分配される収益は決して多くない。年間50万人が訪れる国立公園内にあることを考えると、バンガローを数軒増設すれば、より多くの利益が得られるであろう。しかし、村内の観光事業を拡大していくことに対して、P村の住民は消極的だ。その理由を問うと、皆声を揃えていう「観光は副業にすぎない」と。P村の住民たちは、収入の最大化や拡大再生産といった資本の論理とは全く異なる形で観光に関わっている。P村の住民にとって観光は新しい生業手段である。しかし、その導入はそれ以前の生業を放棄するのではなく、一つの選択肢として加えるにとどまっている。収入の最大化よりも、既存の生業形態や生活を維持しようとするカレンの人々の論理は、ある種のモーラル・エコノミーである（スコット1999）※1。

こうした複合的な生業のなかに一つの選択肢として観光を加えるという姿勢はH村でも同様に見られることである。H村でも観光はあくまで副業として位置づけられ、観光収入の最大化を目論むような動きは皆無である。このような志向性は、もともと複合的な生業の志向性が強いカレンの人々の論理に観光が取り込まれていると解釈することができる。つまり、観光がカレンの生活世界を包摂するのではなく、逆にカレンの生活世界が観光を包摂しているのである。こうした志向を通じて、カレンの人々は、観光という不安定な市場に従属するのではなく、一定の自律性を確保しつつ観光を受け入れることを可能にしている。

しかし、P村の人々が観光に対して消極的であるというわけではない。P村に宿泊する観光客は、村内の「エコガイド・グループ」に加盟している村人のガイドのもと、周辺の水田や畑へ行き、カレンの生業を見学・体験する他、周辺の森へのトレッキングやマウンテンバイク・ツアーに出かける。生業形態こそ異なるものの、P村の人々もH村同様、観光客を村や周辺の森や畑へ案内するときなど、

4 森で獲れる様々な生薬について説明する村びと
5 焼畑の無農薬野菜を使ったカレン料理

※1 人類学者のジェームズ・スコットは、東南アジアの農民社会を事例に、資本主義的原理ではなく、伝統的な価値観やコミュニティの維持といった道徳的・倫理的な原理にもとづいて行なわれる経済的実践に着目し、これをモーラル・エコノミーと呼んだ。

山川草木やカレンの生活文化を熱心に説明し、そのことにある種の「誇り」を見出している人もいる。つまり、観光事業としては非常に小規模な状態を維持しながら、その範囲内で積極的に観光に関わっていくという状況がみられるのである（cf.須永２００８）。

新たな「観光」の枠組みを求めて

近年、途上国の多くの社会でプロプアー・ツーリズム（Pro-Poor Tourism）と呼ばれる観光に注目が集まっている。プロプアー・ツーリズムとは、先住民をはじめとする貧困状況に置かれている人々に、観光を通じて貧困の改善や経済的自立を促すことを目指した観光開発のあり方である。

しかし、ある種の社会的弱者の人々に対し、観光を経済的自立の手段として導入する際には注意が必要である。なぜなら、観光の導入を契機として、既存の生業形態が変化し、観光という不安定な市場に従属するという不均衡な構造を作りだしてしまう危険性があるからである。

では、「小さな共同体」の人々が、一定の自律性を確保しつつ、観光に関わっていくことはいかにして可能か。そのヒントは、本小論で紹介したカレンの人々の実践のなかにあると思う。H村の人々は、観光を対抗的文化運動のアリーナとして練り上げ、P村の人々は観光を多様な生業形態を志向するカレンの生活世界の論理に取り込んできた。どちらも、観光の経済効果や地域活性化といった産業論的パラダイムには包摂し得ない実践である。むしろ、産業論的パラダイムに抗する観光実践といえよう。しかし、だからこそ、資本主義的開発のなかで周辺化されてきた「小さな共同体」の人々にとって、一定の自律性を持ちつつ観光を受容していく一つの可能性となりうるのではないだろうか。

言うまでもなく、観光は様々な要素・側面が埋め込まれた複合的な現象である。従来の観光研究のなかでは、経済的・産業的側面のみを取り上げてそれを目的化することが支配的であった。しかし、ネオリベラリズムがある種の行き詰まりをみせ、経済的指標では測ることのできない「豊かさ」や「幸福」について再考する必要性に迫られていている現在、観光の文脈においても、産業論的パラダイムに抗する観光実践、そしてそれを理論化できるような新たな研究の枠組みが求められている。

1 P村で生産された生花は王室プロジェクトが買い取り、空港などにある王室プロジェクト直営の売店などで販売される。**2** P村で換金用に生産される生花　**3** P村の棚田　**4** コミュニティ・リゾートの概観　**5** コミュニティ・リゾートの内部　**6** P村の風景

参考文献

梅棹忠夫1964『東南アジア紀行』中央公論社

スコット,J.C. 1999『モーラル・エコノミー:東南アジアの農民叛乱と生存維持』高橋彰訳 勁草書房

須永和博2008「「マイナー・サブシステンスとしての観光―タイ北部の山地カレン社会におけるコミュニティ・ベース・ツーリズム」『立教大学観光学部紀要』11、pp.53-67.

須永和博2010「エコツーリズムの社会理論:タイ北部の山地民カレン社会を事例として」遠藤英樹・堀野正人（編）『観光社会学のアクチュアリティ』晃洋書房 pp.182-201.

サンチャゴ市内不法占拠地区

プロプアー・ツーリズムの可能性

チリにおける「スラム観光」から考える

文 内藤順子　写真 内藤順子、北森絵里

1990年代後半、貧困削減を期待されて登場したプロプアー・ツーリズムは、発展途上地域の観光地に暮らす人びとに利益がもたらされるよう配慮した観光をいう。その一形態としての「スラム観光」をチリの事例から検討する。

はじめに

プロプアー・ツーリズムとは、1990年代後半に貧困削減を期待されて出てきたアプローチであり、2000年前後から具体的な観光形態として認知されはじめたものの、明確な定義ができるほどまだ的が絞られていない。「貧困に優しい観光」という日本語訳もみられるが、いまのところ横文字のまま表現されるのが一般的である。大まかに言うなら、開発途上地域の観光地とそこに暮らす貧しい人びとに利益がもたらされるように配慮した観光である。直接的にせよ間接的にせよ、何らかの形で観光にかかわる貧しい人びとが、観光から利益を得るだけでなくそれによって経済的に自立することを理想としている。世界観光機関（UNWTO）は2002年の「持続可能な開発に関する世界サミット」において「観光事業による貧困の軽減」を発表し、プロプアー・ツーリズムは、その活用可能な具体案として脚光を浴びた。そこでのプロプアー・ツーリズムとは、北の観光客が貧しい南のホストに利益を還元するゆえに南北問題を解決するという想定であり、観光という先導的産業の最先端案件としての地位を得ている。こうした理想を掲げることは大事であるが、まだこの現象が萌芽期にあるいま、どうしたらプロプアー・ツーリズムがプラスの可能性をもちうるかを検討しておくことは重要である。

1

2

プロプアー・ツーリズムの一形態としての「スラム観光」

プロプアー・ツーリズムは、芽生え段階であるだけに幅広くさまざまな形態のものがそう呼ばれており、それが観光産業に組みこまれた場合には、サービス産業である以上やはりゲスト（観光客）側の「ある種の期待」に必要程度は応えねばならない。そうなってくると、ホスト側には「貧困に優しくしたい人たちに応える」という制約や圧力が生じ、ホストとゲストの間には奇妙で問題含みの複雑な関係性がうまれることになる。

そのなかで、とりわけ貧困をわかりやすく対象にして特化した形で実施されつつあるのが「スラム観光」である。文字どおり、観光客が「観光地＝スラム」を訪問し、その収入でスラムを改善するという実践である。地域によってさまざまだが、観光客がスラム地

1「スラム観光」候補地区の親子　2「スラム観光」候補地区で売られる車　3 チリの「スラム観光」候補地区の家屋内部。スタディ・ツアーではありのままの日常の生活の場を訪れる　4「スラム観光」候補地区のこどもたち　5「スラム観光」候補地区の家屋

3

5

4

区の学校を訪ねて子どもたちをふれあったり、メキシコの教会が主催するのツアーではゴミの山で生計を立てる人たちに配布するサンドイッチづくりのボランティアを観光客にやってもらうかわりにゴミの山を案内したり、居住空間などのプライベートな部分を含めたスラム住民の生活環境を見せてもらって「現実」を知る、といった内容になっている。世界各地で実際に実施されている「スラム観光」は、たとえば以下のように呼ばれている。

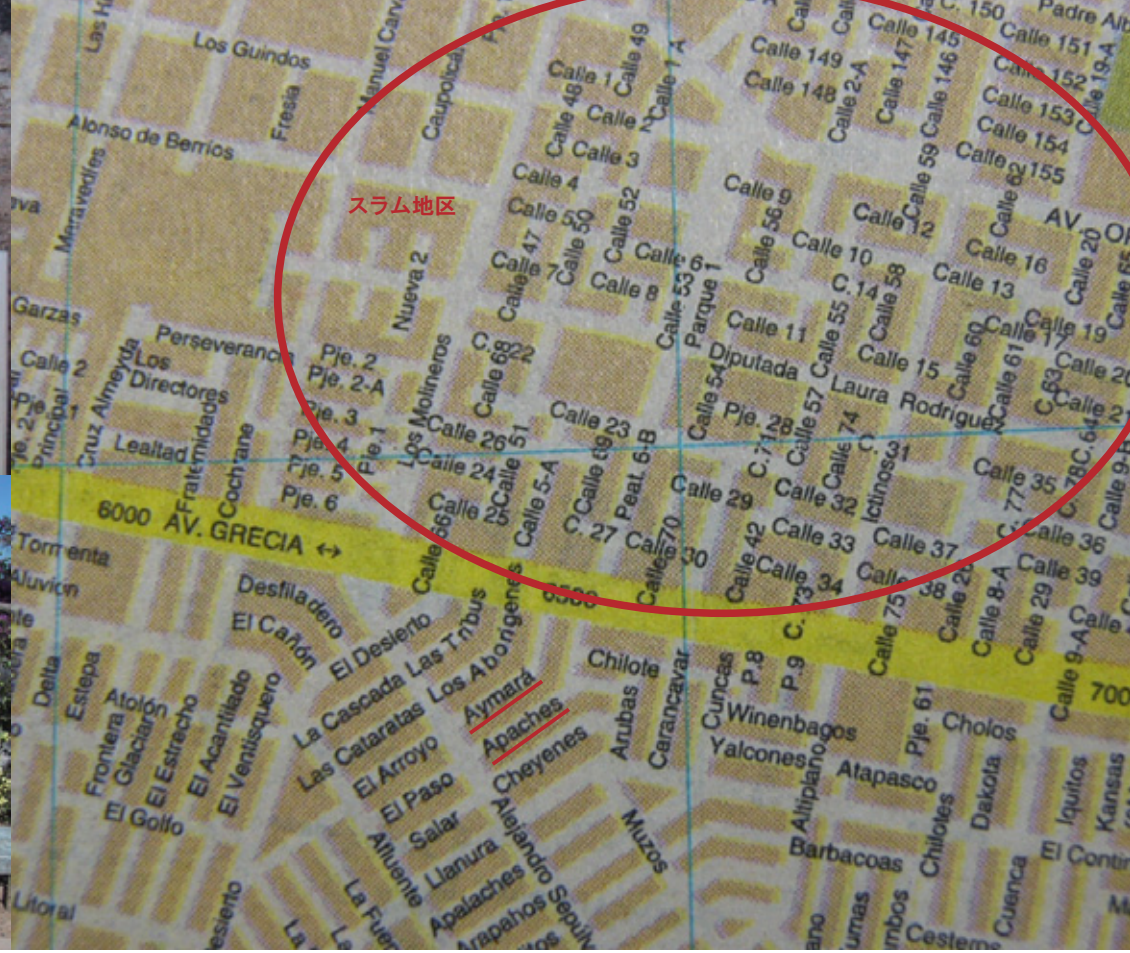
インド Reality Tours
インドネシア Jakarta Hidden Tours
ブラジル Favela tour
アメリカ合衆国 Beauty's Ghetto Bus Tours
ケニア Urban Safari/ Victoria Safaris
メキシコ Garbage dump tours

インドでは『スラムドッグ・ミリオネア』というアカデミー賞をはじめとする数々を受賞した2008年の映画作品の舞台となったスラムが話題を呼んだ頃、時を同じくして「スラム観光」がはじめられた。ブラジルでも『シティ・オブ・ゴッド』という映画がきっかけでファベーラと呼ばれる都市周辺に形成されるスラム街を意味する場所が有名になり、2006年頃から見学が始められている。その他の現行のツアー名称をながめてみると、インドの「リアリティー・ツアー」や、インドネシアの「ジャカルタの隠された貧困ツアー」といった資本主義を形作る世界のひずみを見るというタイプのツアーがある。いっぽうで"Urban Safari"や"Beauty's Ghetto"といった皮肉としか思えないような名前が付けられたツアーも、好奇心にみちた観光客を刺激している。それは「奇異なものが見られる場としてのスラム」という視点がそのまま表れているようにもみえる。実際にスラム観光に参加した客のアンケートをとって分析したMaはその動機の大半が「好奇心・ものめずらしさ(Curiosity)」であることを述べている(Ma, 2010,p.42)。

「スラム観光」にはまず倫理の問題が付きまとう。それは、ひとの暮らしぶりを物見遊山的にのぞいてもよいものなのかという、ある種の後ろめたさであろう。ではこの後ろめたさはどこからきているのだろうか。もし、「貧困」あるいは「スラム」をひとつの文化としてとらえるなら、「スラム観光」はたんなる異文化の観光である。ロサンゼルスを訪れた観光客がオプショナルツアーで、ビバリーヒルズの邸宅群を見て回るのとかわらない。しかし、スラムの場合は異文化である上に、現にある経済的格差がそこに優劣感覚を盛り込むため、差異が優劣へと転化し、憐憫と施しと連帯の実践としての「スラム観光」が登場するのである。さらなる問題は、その貧困をどうとらえたうえで訪れるか、ということである。この点について実際に、チリで繰り広げられた「スラム観光」のごく初期の具体例をもとに、検討してみたい。

チリにおける「スラム観光」のはじまりの場面から

チリでは目下、政府主導の観光政策の一環



1 チリの「スラム観光」広報に載せてくれとポーズをとる男たち　2「スラム観光」候補地区の3世代　3 外来者を歓迎する「スラム観光」候補地区の家族

［資料1］サンチャゴ市内の地図にはスラム地区の名前は記されておらず、すべて番号による道路表記になっている。

として「プロプアー・ツーリズム」についての検討が行われているが、プロプアー・ツーリズムという概念自体は認知されているものの、まだ具体的な実施段階にはない。それは、①どう貧困者を巻き込むかという問題、②観光マーケットとして需要が小さい可能性（ハイリスク・ローリターンの懸念）、③プロプアー・ツーリズムについての資料および成果報告の少なさ、という3つの問題がその腰を重くしているからであるという（C.Ashley 2007）。それゆえ、ペルー、アルゼンチン、そしてブラジルといった近隣諸国における事例が紹介されたことも手伝って、プロプアー・ツーリズムのわかりやすい形態としての「スラム観光」がもっぱら注目されてきた。

その「スラム観光」に先立って、2004年頃からチリ大学社会学部の調査実習に実験的に「スラム体験観光」が取り入れられている。それには履修単位が出るものの、聞き取り調査や暮らし向きの分析等を行うわけではなく、学部の初期段階の学生を対象としたあくまで体験を重視した徒歩によるスラム見学であり、自国内の貧困の暮らしに足を踏み入れ、現実を目の当たりにすることを目的としている。

スラム住民の教育歴についての統計では大学進学者は皆無であり、つまり訪れる学生はすべて中産階級以上の家庭環境にある。チリは明確な階層社会であり、2010年のチリ国勢調査資料（CASEN 2010）によれば、チリ全人口の15.1%、首都人口の23%が貧困層または極貧層にあたる。4人に1人が貧困者という都市部では、当然ながら街で貧困者を目にすることも多い。彼らの多くは生業としての都市雑業（廃品回収や日雇い掃除、車の見張りや物売りなど）に従事しているわけだが、中産階級以上の人間は身近にそうした彼らがいてその様子や存在を知ってはいても、彼らの暮らす地区に足を運ぶことはなく、ニュースで流れるテレビの情報によって生活の様子をイメージする程度のかかわりかたしかしていない。

また、サンチャゴ市の地図を開いてみると、それだけで貧困地区かそうでないかがわかるようになっており、中産階級や上層階級が居住する地区では道路や路地に趣向を凝らした名前がつけられている。たとえば、Aymará、Apaches、Navajos、といった北米先住民の名前や、Cuenca、Dakotaといった地名だったりとさまざまである（［資料1］の下部）。最高級住宅地の目抜き通りはAv.Kennedyであり、裏道はNapoleónやIsidra Goyenechea（チリの女流作家）といった偉人や著名人の名前が付されている。いっぽうスラムはそれぞれ独自の名前を持っており、La Bandela（旗）とかSan Luis（聖ルイス）などそれなりに由緒あるものが多いが、地図上にはそれは書かれておらず、スラム地区はすべて番号による道路表記になっている。Calleという「通り」を意味する単語か、Pje.（Pasaje）という「路地」的意味合いを持つ単語の後に番号がつくだけのシンプルなものである（［資料1］の上部）。体験観光ではこの番号地区を5～6人のグループで歩いて回り、地図上では番号でしかない道路や場所にも生活があり、実際には「○○さんちの前通り」、「炊き出し通り」、「車堰きとめの角」などと呼ばれていることを知る。

そうして三次元でスラムを体験するなかで最もインパクトがあるのは、そのにおいである。チリでは、平均1か月程度、ながければ3カ月程度の夏休みをとるのが慣例であり、通常はその休暇中ずっと海浜地域に滞在する。チリ国家統計局によれば首都人口の実に6割が不在となり、スラム住民も例外ではない。そのため、体験観光が行われるのは住民がいる冬の時期の場合が多く、チリの冬は雨期と重なるので、スラム地域は常にぬかる

上 ブラジルのファベーラ遠景（北森絵里撮影）
下 ブラジルのファベーラ・ツアー実施の様子。右はガイド、左の人びとがツアー客である（北森絵里撮影）

チリの「スラム観光」候補地区の家屋入口。
雨期である冬場、洗濯物の生乾きで湿ったにおいや動物のにおいが立ち込める。

1 チリの「スラム観光」候補地区において、こどもたちのチリ先住民族の衣装と舞踊をツアーの出し物とすることを計画している。そのひとつ、アイマラの衣装　**2** 同じくマプチェの衣装　**3** 同じくラパヌイ（イースター島）の衣装

んでいて足場が悪く、湿った洗濯物が干したままになっており、長く洗っていない犬猫のにおいと腐った牛乳の酸味のあるにおいが合わさったような、いわく言い難いにおいがたちこめている。臭気にむせかえる学生や、自らの生活環境とは全く違う世界がこのような身近なところに広がっていることに涙する学生も少なくない。こうした衛生上の問題もあるように見える暮らしの中で、こどもたちが楽しそうに遊び、笑っているのを目撃した学生たちの多くが「彼らが笑っていたことに驚いた」という。笑う、という人間としてごく当たり前の行為に驚くのは、「貧困の暮らしは悲惨である」というイメージがそうさせているからに他ならない。このようなある種の「発見」を誘発することが、体験観光の目論むところでもある。ここからはじめて、番号でしか表記されない場所に暮らす劣位に見ていた人びとと自らは同じ人間であることを知り、貧困の何が悪いのか、貧困に対して何ができるのかを考える契機ともなる。

いま、世界で実施される「スラム観光」は、一般的な観光地訪問や買い物を楽しむ一連の流れのなかにスラム見学が半日ほど入る物見遊山的なタイプと、ひたすらスラムにおけるボランティア的活動を手伝ったり住民と交流するボランティアツアーやスタディツアータイプのものと、少なくとも2種類がある。先に記した世界各地で実施されている「スラム観光」はすべて前者である。

しかし、チリでは観光産業のひとつとして「スラム観光」を実施するにあたっては、自国の大学生による実験的スラム体験観光の様子をうけ、物見遊山型は退ける方針である。かといって悲惨な状況にいる憐れむべき対象として救済や援助を前提にして積極的にかかわらせることも推してはいない。ただ現場を訪れて自らの無知や思い込みを知り、あらためて貧困について考えるきっかけを与えるようなものとして機能するよう、思案を続けている。

プロプアーであるために

どうすることがプロプアー、すなわち貧困者のためになり、貧困に優しいことなのか。プロプアー・ツアーに参加することによってそれを真剣に考える契機を得る、というのはひとつのありかたであろう。予め、プロプアー・ツーリズムとはかくあるべきという、かっちりとした定義で固めてしまうのではなく、「どうすることがプロプアーであるかを見聞するツーリズム」という二段構えにするなら、プラスの意味での観光の可能性が見えてくるだろう。プロプアー・ツーリズムが相手にするのは当然ながら人間であり、観光の対象となるのはその人たちの暮らしの場である。相手にはさまざまな事情があり、国や地域によってその状況やニーズ、幸せの感じ方も異なる。また、自らの生活をさらけ出して多少演出めいたことをするのも厭わないところもあれば、断固プライバシーは守りたいところもあるだろう。

プロプアー・ツーリズムはそうした現地の状況や心情、多様性を了解したうえで、臨機応変に運営する体制が整えられる必要がある。そうでないかぎり、「貧困に優しい」というその善意に根差した文言は、貧困者とそれを見に来る豊かな観光客という構図を永遠に維持し続けるという意味で暴力的なものになる。自己満足でしかない貧困者支援の一環（自分が行くことが彼らの助けになる、という思い込み）としての「スラム観光」ではなく、みずからの貧困のイメージがいかに一面的であるかを知ること、「貧困」概念の再考までを企図することなど、プアーにかかわる問題についての根本を問う態度とその方法の模索がなされるかどうかが重要である。「プアーありき」でそこを訪れるという単純なものでおわるかどうか、この点こそが「スラム観光」ひいてはプロプアー・ツーリズム自体が可能性をもちうるかどうかの分かれ道となるだろう。

参考文献

Ashley, Caroline y Goodwin, Harold. 2007 "Turismo Pro-pobre"- ¿Qué ha ido bien y qué ha ido mal?, Opinión80, Overseas Development Institute.

Contreras, Dante, Cooper Ryan y Neilson Christopher. 2007 Crecimiento Pro Pobre en Chile. Serie Docmentos de Trabajo, Departamento de Economia. Universidad de Chile.

Ma, Bob. 2010 A Trip into the Controversy: A Study of Slum Tourism Travel Motivations. University of Pennsylvania.

江口信清（編著） 2010『貧困の超克とツーリズム』明石書店

Amusement Parks in Denmark and Germany

毛谷村研究室（観光学部観光学科）

2010年8月上旬、毛谷村ゼミは
ヨーロッパの古い遊園地を訪ねる調査合宿に出かけた。
訪問先は、デンマーク・コペンハーゲンにあるチボリ公園とバッケン、
ドイツの移動遊園地ハンブルグDOM。
海外の遊園地の空間を体験しながら、
その特徴を観察・分析するのが目的だ。

Bakken

バッケン
コペンハーゲン（デンマーク）

1583年開園。世界最古の木製ジェットコースターがある。最寄り駅はグランペンポー駅。周辺の鹿公園には2000頭の鹿が放たれている。

私たちはお昼ごろ、コペンハーゲンから電車に乗って世界最古の遊園地であるバッケンに向かった。車窓からの景色は次第に古いヨーロッパの田舎町になった。最寄り駅はがらんとしていたが、遊園地に向かう馬車が待っていた。馬車に乗って森の中を進むと期待が高まったが、しばらくすると係員が現れ、開園はこれからだという。日本の遊園地とは違い、閉園時間も遅いのだ。お昼を過ぎた頃、ようやくお客さんが現れ始めた。子供を連れた地元のデンマーク人がほとんどだった。遊園地内はアトラクション同士が密接しておらず、広々としていた。ジェットコースターなどの大型アトラクション以外に、ゲームセンターや射的のような小銭で遊べる出し物も多くあった。乗り物にひたすら乗っている人もいれば、散歩の途中に立ち寄ったような人など、遊び方は人それぞれで、みな思い思いに楽しんでいるようだった。（宮澤知夏）

バッケンは木造のジェットコースターと新しいものとが同居する遊園地だ。日本でいうと「公園」という方がしっくりくると思った。飲食店や出店があり、スペースを埋めるようにアトラクションがある。テーマパークではないので、それぞれにストーリー性はない。サンリオやディズニーのキャラクターの風船が一緒に売られていたりする。それぞれのアトラクションの入り口でお金を支払い、乗るというシステムになっている。（野尻竜也）

Tivoli

チボリ公園
コペンハーゲン（デンマーク）

1843年開園。ヨーロッパで3番目に入場者数の多い遊園地。コペンハーゲン市内にあり、夜もライトアップされてにぎわう。

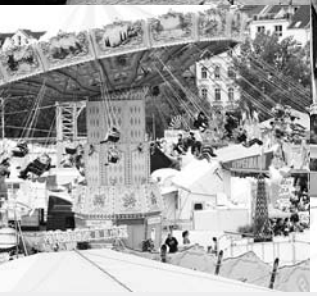
チボリ公園は、コペンハーゲン駅の目の前にある。都心の真ん中に街のシンボルになるような遊園地があるのだ。園内のアトラクションは日本の遊園地より激しいものばかりで、見たこともないような回転をする絶叫マシーンがあった。アトラクションの設置される間隔は狭く、柵などがない。休憩しているベンチのすぐ横で大型の絶叫マシーンが回転し、悲鳴が飛び交っているのだ。私は見ているだけでも恐ろしかった。しかし、利用者は若者だけではない。子供連れのファミリーも多く、地元の人らしき中高年がお酒で乾杯し、談笑していた。日本の遊園地では中高年が仲間同士で来るのをあまり見たことがないので不思議な感じがした。チボリ公園は、子供の遊び場だけではなく、仲間との集いの場だった。（宮澤知夏）

バッケンに比べると新しい遊園地だ。広さも大きく、アトラクションの種類も成人、幼児と年齢に合わせて用意してあり、いろいろな目的で訪ねられるように設計されている。園内に池や広場があり、憩いの場としての役目も果たしているようだ。私たちが訪れた際には広場に特設ステージを設けてロックバンドのライブが催されていた。テーマパークではない分、自由に企画ができるのだろうと思う。他の催事用のスペースでは東アジアをテーマとしたファッションショーのような見せ物もあった。（野尻竜也）

Hamburger DOM

ハンブルグDOM
ハンブルグ（ドイツ）

巨大な青空市と遊園地が一緒になったようなドイツ最大の移動遊園地。露店や大観覧車などのアトラクションが期間限定で街中に出現する。



最寄りの地下鉄駅から徒歩数分、およそ移動型とは思えないほど立派な遊園地が目の前に現れた。正直なところ、移動型遊園地なんて児童向けの子供だましのような造りだろうと高をくくっていたが、予想を裏切られた。電飾を施されたゲートをくぐり園内へと進むと、派手な絶叫マシーン群と悲鳴にも似た歓声が私たちを出迎えてくれた。やはり移動型遊園地ということでアトラクション同士の設置間隔は狭くなっており、園内はちょっとしたお祭り騒ぎのようだった。年齢層は比較的若く、地元客や観光客が集団で遊びに来ているという風だった。皆思い思いに楽しんでいたが、絶叫系が苦手な私とっては観覧車が一番楽しめた。夜の帳が下りるにつれアトラクションの電飾が一層際立ち、観覧車から眺める園内およびハンブルグの夜景は宝石箱をひっくり返したように綺麗だった。（中澤諒典）

バッケンの模型をつくる

毛谷村ゼミがヨーロッパの遊園地を調査対象に選んだ理由は、「快適な空間とは何か」を実体験することにある。帰国したゼミ生は、遊園地内のアトラクションの構成の特徴や空間的なゆとりを体感するため、バッケンの模型づくりを行った。

1 毛谷村教授とゼミ生　2 バッケンの園内MAP　3 アトラクションの高さはゼミ生と一緒に写真を撮ることで人体寸法から割り出す　4 模型の素材はスチレンボード　5 アトラクション以外の建物も一軒ずつ大きさと形を記録する

遊園地とは本来どのようなものであったのか

毛谷村英治（観光学科）

絶叫系ライドマシーンが今も若者世代の人気を博しているが、遊園地とは本来どのようなものであったのかを知り、その空間的な特徴を実際に体感することを目的として世界最古の遊園地といわれるBakkenが現存するデンマークを訪れ調査合宿を実施した。

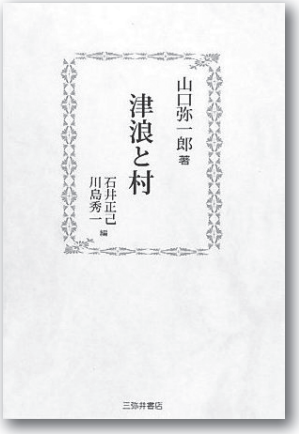
デンマークには日本でもその名を冠した遊園地があったTivoliや知育玩具のLegoが運営するLego Landもあり、遊園地を観て回るには最も適した国である。ヨーロッパにはこういった常設遊園地の他にサーカスのように期間限定で各地を巡業する移動遊園地が存在している。世界最大級の移動遊園地として名高いHamburger DOMが隣国ドイツで開催されることから、その開催日程を事前に調べ、この移動遊園地も実際に体験調査できるよう渡航期間と移動順序を決定した。

日本では子供や若者のための乗り物遊具が中心の遊び場としての印象が強い遊園地であるため中高年の人々がコーヒーやビールを飲みながら園内で深夜まで歓談している光景は我々にとって新鮮であった。森林公園の中にあるような遊園地や都市内の広場に合体変形ロボットのように一晩で忽然と現れる移動遊園地は日本では馴染みが薄い。移動遊園地を運営する人々が各地から集まりキャンピングカーで寝泊まりしながら営業している様子も垣間見ることができた。この調査合宿に参加した学生たちが、今後の日本における遊園地のあり方について捉え直すきっかけを掴んでくれていることを願っている。

Book Review

読書案内

今回の読書案内は、本号の特集テーマの執筆陣が選んだ「観光」の可能性を考えるうえで興味深い視点を与えてくれる2冊。



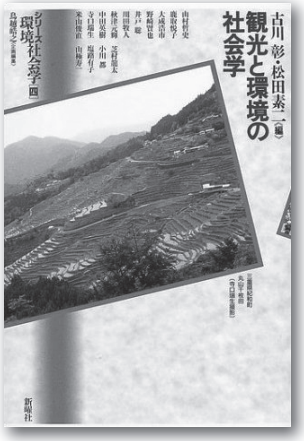
津浪と村

山口弥一郎著
（石井正己・川島秀一編）（二〇一一）
三弥井書店（本体一八〇〇円＋税）

なぜ、折角高台に移転した村が、原地に復帰してしまうのか。これまで幾多の津波に飲み込まれ、その度に高台へ移住するも、時間の経過とともに徐々に元の場所へ戻ってしまう。こうした三陸海岸の人々の営為を、私たちはどう考えるか。同じ過ちを繰り返す何か別世界の人間だと片づけてしまってはいないだろうか。冒頭のシンプルな疑問に対し、自らの生涯をかけて追求したのが、山口弥一郎である。

山口弥一郎（1902〜2000）は、福島県会津美里町に生まれ、中学を出たのち小学校の教員となり、1928年より磐城高等女学校教諭として奉職しながら東北の村々の調査を展開した。1933年3月のいわゆる昭和三陸津波が契機となって、その2年9ヶ月後に津波調査を開始し、その後半世紀以上にわたって三陸海岸を歩きつづけた。牡鹿半島から下北半島までの集落を訪ね、丹念に調査したところを論文で発表するかたわら、柳田国男の「漁村の人々にも、親しく読める物を」という助言に従い、一年後の1943年にまとめたのがこの『津浪と村』である。

山口自身が認めるように、調査は多年にわたり断続的に行われたため、必ずしも網羅的・体系的なデータが得られたわけではない。しかし、山口の狙いは別にあった。津波調査の最初の旅の途中、山口は当時の内務省による津波調査報告書を見せられた。すでに航空写真や復興計画など、集落毎の体系的な調査は行われていたのだ。山口は自ら足で稼いだ不精確なデータを手に、愕然とする。一度は調査の中止を考えた山口だったが、師の激励もあって思い直す。すなわち、航空写真には決して表れ得ない、地元民への丹念な聞き取りに基づいた、津波に遭うも原地に復帰してしまう人間の心性の探究……これが山口の生涯のテーマになった。これを無視して、冒頭の問題は解決しない。「津波の話は暗くて、時日がたつと地元の人々にさえ嫌われるが、災害直後の調査記録、反省、対策を細らせたり、消してしまわないように持続することが大切である」という山口の魂は受け継がれなければならない。本書は、この度編者による解説付きで復刊された。（佐野浩祥）



観光と環境の社会学

古川彰・松田素二編（二〇〇三）
新曜社（本体二五〇〇円＋税）

バブル崩壊後の日本では、合理性や効率性を重視する資本主義的コスモロジーに抗する「もう一つの世界」を体現するトポスとして、農山漁村への注目が高まっていった。農林漁業などの生業や、そこに埋め込まれた生活原理が「自然と共生する人間の豊かな営み」として再発見されたのである。そして、こうしたまなざしに地域社会側も応答する形で、グリーン・ツーリズムと呼ばれる農山漁村を舞台にした新たな観光実践が生まれた。

本書は、日本各地におけるグリーン・ツーリズムの取り組みを、地域生活者の視点から見直し、その展望を考察したものである。

日本の農山漁村は、常に「都市の論理」を一方的に押しつけられてきた。都市への労働力供給源と位置づけられた1960年代。都市生活者に憩いとレジャーの場を提供する役割を担わされ、大規模なリゾート開発が進行した1980年代。こうした構造的問題は、1990年代以降に本格化するグリーン・ツーリズムにおいても変わらない。なぜなら、都市部のツーリストは、対象社会に対して「自然との共生」「エコライフ」といった一方的なまなざしを投げかけ、その基準にしたがってホスト社会を一方的に体験するからだ（p.21）。

しかし本書が着目するのは、こうした「都市の論理の一方的押しつけ」という構造的制約のなかにありながらも、さまざまな創意工夫によって、自らの生活世界を変革してきた構造的弱者の創造性である。「あまり儲からないが村に一定の収入を保証する開発」（p.27）や「市場の外延で現金を得る機会」（p.236）を楽しむといった、資本の論理とは異質なやり方で、観光や地域振興に関わっている地域生活者の姿を克明に描き、こうした生活実践のなかに今後の「小さな共同体」の可能性をみる。

豊富な民族誌的事例から資本の論理とは異なる論理で観光に関わることの可能性を検討し、観光の産業論的パラダイムを相対化する本書は、今後の観光の可能性について考える際に興味深い視点を提供してくれる。（須永和博）

観光学部公開講演会
震災の経験を伝え、生かす――宮城県観光の復興へ

観光学部は二〇一一年十一月十五日、公開講演会「震災の経験を伝え、生かす――宮城県観光の復興へ」を開催し、東日本大震災の被災地の現場の方々から復興に向けた現状と今後の取り組みについて、「観光」に焦点をあててお話いただいた。

二〇一一年一一月一五日（火）
立教大学新座キャンパス
一号館二階 N二一教室
司会　佐野浩祥（観光学部）

東日本大震災から8ヶ月が経過して、被災地はどのような状況にあるのか。そして、復旧・復興に向けて、どのような取り組みを行っているのか。震災直後、私たちはテレビやインターネットを通じて、被災地の状況を知ることができたが、時間の経過とともに被災地がメディアに取り上げられる機会は減ってきている。そのことで、「復旧・復興は一段落した」と思われたり、人々に忘れられたりすることを、被災地の方々は危惧している。

今回、宮城県から様々な立場の方にお越しいただき、被災地の今までとこれからについて、特に「観光」に焦点をあててご報告いただいた。

宮城県観光創造会議座長の志賀氏からは、津波の悲惨さが映像とともに報告され、宮城県の観光を通した復興の構想をご紹介いただいた。松島観光協会の佐藤氏は、他の地域に比べて松島の被害は大きくなかったが、復旧・復興に向けてはまだまだ緒に就いたばかりであること、南三陸町の佐藤氏・渡邊氏からは被災当時の町の状況を克明に語っていただいた。

上 宮城県観光創造会議座長の志賀秀一氏
下 南三陸町の被災状況を語る語り部の佐藤かつよ氏

プログラム

12:15 ～ 12:25
宮城県観光創造会議座長 志賀秀一氏

12:25 ～ 12:35
松島観光協会会長 佐藤久一郎氏

12:35 ～ 13:15
南三陸町
語り部（佐藤かつよ氏・渡邊とみゑ氏）

主催
立教大学観光学部

共催
宮城県

最近の観光学部講演会

開催日	講演者	演題
2011 4／25	石森　祐亮 株式会社ソニー・マガジンズ『ワッツイン』編集部副編集長	“編集者”に欠かせない「ホスピタリティ」 ――アーティストの話を“上手に”聞き出す術――
5／11	タサニー・メーターピスィット タマサート大学教養学部日本語学科　准教授	言葉からみる日タイの異文化理解と交流 ――山田長政からトムヤムクンまで――
6／17	羽生　冬佳 筑波大学大学院人間総合科学研究科 准教授	世界遺産と観光
6／21	北見　幸一 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 准教授	観光における広報・PRの役割
10／1	小田禎彦 株式会社加賀屋代表取締役会長	“日本のおもてなし”初の海外進出……その思い
10／4	スニーラット・ニャンジャローンスック タマサート大学教養学部日本語学科　助教授	外国で学ぶ――私の留学体験
10／12	スティーブン・クレイグ・スミス クイーンズランド大学法経学部観光学科　学科長	クイーンズランドの観光
10／17	佐古ウスビ 京都精華大学人文学部　准教授	地域住民の観光への参与とその展開の可能性
10／21	浅沼正和 JTBハワイ・コミュニティーリレーションズ・ディレクター	ハワイにおける観光事業の歴史
10／21	浅沼正和 JTBハワイ・コミュニティーリレーションズ・ディレクター	戦争をこえて、観光がつくる新しい国際関係
11／14	豊田三佳 シンガポール国立大学社会学科　准教授	メディカルツーリズムの戦略 ――タイ、シンガポール、インドの事例から――
11／15	志賀秀一 宮城県観光創造会議座長 佐藤久一郎 松島観光協会会長 佐藤かつよ 南三陸町　語り部 渡邊とみゑ 南三陸町　語り部	震災の経験を伝え、生かす ――宮城県観光の復興へ

Lecture | 最近の講演会から

クイーンズランド（オーストラリア）の観光

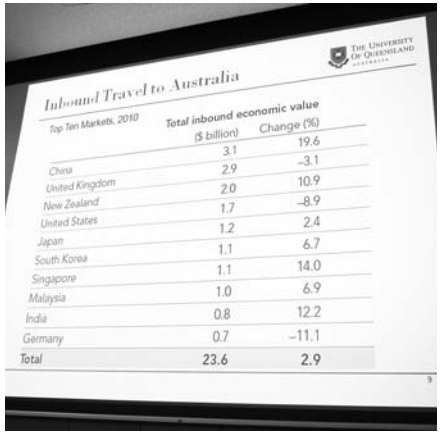
二〇一一年十月十二日、クイーンズランド大学法経学部観光学科のスティーブン・クレイグ・スミス学科長が新座キャンパスを訪問され、学部一年生を対象に講演会が開催された。

二〇一一年十月十二日（水）
スティーブン・クレイグ・スミス
クイーンズランド大学法経学部
観光学科　学科長
立教大学新座キャンパス

今回の講演は昼休みに開催されたごく短いものであったが、参加者は熱心に聴講していた。

講演テーマはオーストラリアにおける日本人観光マーケットについての分析であり、日本人のオーストラリア観光渡航の趨勢、日本人観光客の行動特性、文化的差異を前提とした受入体制など、多面的な視点から資料を駆使して、分析的な講演が行われた。オーストラリアへの日本人渡航者数は伸び悩んでおり、傾向的には減少している。とはいえオーストラリアにとって、依然日本は主要な観光マーケットであり続けている。一方、日本からのワーキングホリデイの渡航先として、オーストラリアは第1位であり、北海道のニセコのように多くのオーストラリア人観光客を受け入れる地域も出現している。観光を巡る日豪関係が大きく変化しつつある現在、きわめて示唆に富んだ講演であった。

講演の最後にクイーンズランド大学における観光教育の紹介が行われた。クイーンズランド大学法経学部観光学科は同国でもっとも評価の高い観光教育機関であり、今後とも立教大学観光学部との相互交流など関係の深化が期待されている。



上 オーストラリアのインバウンド旅行市場。近年、オーストラリアへの日本人渡航者数は伸び悩んでいる　**下** スティーブン・クレイグ・スミス学科長

このコーナーでは観光学部が行う国際交流の現場を随時報告していきます。

協力大学との連携による短期海外プログラム

言語と文化現地研修

2011.8.25-9.8　タイ（タマサート大学）
2011.9.4-9.17　ハワイ（ハワイ大学）

二〇一一年八月から九月にかけて、日本学生支援機構の留学生交流支援制度の援助を得て、言語と文化現地研修を実施した。言語と文化現地研修は二年次以上の選択科目であり、言語習得と現地における生活文化の直接体験を目的とする、短期海外プログラムである。観光学部では1年次に早期体験プログラムという導入コースを配置しており、学部協定校、大学協定校への交換留学のチャンスも多い。言語と文化短期研修はこの両者をつなぐ、中間的な教育プログラムとして位置づけられている。

今回は米国のハワイ大学、タイのタマサート大学との事例を紹介することにしよう。言語と文化現地研修は協力大学との綿密な連携の上で実施されており、派遣された学生が受入大学の教員、学生と協力しながら主体的に組み立てていく、能動的な海外体験といえよう。目的の第一は言語の習得である。もちろん2週間程度の短期では、大きな向上は望みがたいとはいえ、観光学部では西欧諸言語をはじめ中国語、朝鮮語はもちろんマレー語、ベトナム語、タイ語などアジア諸言語とそれを通じて文化を学ぶ科目群を、協力大学からの招聘教員を中心に配置し

タイの学生と野外学習や文化体験を実施（撮影／桒野淳一）

学部国際交流の現場から

マラヤ大学の学生、新座キャンパスを訪問
2011.6.14－19

2011年6月、学部間協定校のマラヤ大学（マレーシア）から教員2名と学生13名が日本研究コースの卒業研修の一環として日本を訪問しました。15日間の日本滞在日程中の6月14日から19日まで新座キャンパスに滞在し、日本文化と日本語について本学観光学部生と合同ゼミを行い、交流を深めました。

ている。これらの座学と組み合わされ、言語と文化現地研修は期間以上の効果をあげることが期待されている。目的の第二は現地での生活体験を通じた文化理解であり、第三は協力大学学生との交流である。内容はプログラム毎に多少の違いがある。ハワイ大学では午前中に英語による観光関連とハワイ文化の講義、午後は同大学マノア校旅行産業学部の講義に参加する形式であり、休日は自主的なプログラムで野外学習を実施した。一方タマサート大学では、タイ語、タイの政治経済、文化についての講義の他、現地学生と共同で野外学習や文化体験を実地で行っている。ことにタマサート大学では滞在期間全体にわたって学生寮に住み込み、受入側の学生と寝食を共にした。これは双方の参加学生の相互理解にきわめて大きな役割を果たしたと考えている。

来年度は前記二校をはじめ、いくつかの大学との連携で言語と文化現地研修が実施される。ことにタマサート大、マラヤ大、中山大（中国）との間では、初めて相互訪問による双方向プログラムを実施することになっており、より大きな成果が期待されている。

ハワイ大学マノア校旅行産業学部の講義に参加

言語と文化現地研修（タイコース） プログラム日程
タマサート大学

Date/Time	รายการ/กิจกรรม						Residence Food Transportation
	08.30 -10.30	10.30-12.00		13.00 -16.00	16.00-18.00	18.00-20.00	
2011/8/25 (Thursday)				15.25 arrive at Bangkok	16.00 Guidance		IEAS Microbus
2011/8/26 (Friday)	9.00-10.00 Orientation	10.00-12.00 1 Thai Language		13.30 -16.30 L2.Thai Culture and histo	18.00-20.00 Welcome Party		Dormitory 3 meals
2011/8/27 (Saturday)	08.30 - 10.00 E.1 Klongkhone Samutsongkram	10.00 - 12.30 E.1 Klongkhone Samutsongkram		13.30 - 16.30 E.1 Klongkhone Samutsongkram	16.00 - 18.00 E.1 Klongkhone Samutsongkram	E.1 Amphawa Samutsongkram	Homestay 3 meals microbus
2011/8/28 (Sunday)	08.30 - 10.00 E.1 Klongkhone Samutsongkram	10.00 - 12.00 E.1 Klongkhone Samutsongkram		13.30 -16.30 E.2 JJ Market Bangkok	16.00 - 18.00 E. 2 JJ Market Bangkok		dormitory 2 meals microbus
2011/8/29 (วันจันทร์)	09.00 -12.00 Rangsit Campus Tour			13.30 -16.30 L.Thai Language			dormitory 3 meals
2011/8/30 (วันอังคาร)	08.30 - 10.30 Tha Prachan Campus T	10.30 - 12.30 T.3 Wat Pra Kaew		13.30 -16.30 T.3 Royal Palace	16.30-20.00 T.3 Khaosarn Road & China town		dormitory 1 meals Bus
31/8.2011 (วันพุธ)	09.00 -12.00 L.Thai Language & Culture			13.30 -16.30 L.Thai Studies			dormitory 3 meals
2011/9/1 (Thursday)	09.00 -12.00 L.Thai Studies			13.30 -16.30 L.Thai Studies	16.30-20.00		dormitory 3 meals
2011/9/2 (Friday)	09.00 -12.00 L.Thai Language & Culture			13.00 -16.00 & MRT to BUSINESS AREA (SIAM & SUKH Bangkok			dormitory 2 meals Bus/BTS/MRT
2011/9/3 (Saturday)	09.00-11.30 E4 Boat trip to 9 temples (Ko Kret) Nonthaburi			13.00-16.00 E.4 Making Thai Sweets Nonthaburi			dormitory 3 meals Bus, Boat
2011/9/4 (Sunday)	08.30 - 10.00 E5 Wat Pananchoeng Ayudhaya	10.00 - 12.30 Siwattanaram/ Mahathat		13.00 16.00 E.5 Ayodhaya Floating Ma	16.00 -18.00 E.5 Wat Jaedi Hoy Ayudhaya		dormitory 3 meals microbus
2011/9/5 (Monday)	09.00-11.30 E.6 OTOP housewife group Pathumthani			13.30 18.00 E.6 Training Center Bangsai Ayudhaya			dormitory 3 meals microbus
2011/9/6 (Tuesday)	Self Study			Self Study		18.00-20.00 Cirtificate cerem Farewell Party	dormitory 1 meal
2011/9/7 (Wednesday)	Summing up and evaluation			Prepare for leaving		22.20 leave for Toky	1 meal microbus

言語と文化現地研修（ハワイコース） プログラム日程
ハワイ大学マノア校　旅行産業学部

日時	午前			午後		宿舎
9月4日(日)		7:56 ホノルル到着 NH7024		13:30〜14:00 ガイダンス Lincoln Hall		Lincoln Hall
9月5日(月)	09:00〜16:00 自主研究(ホノルルおよび周辺地域)					Lincoln Hall
9月6日(火)	8:00〜9:00 オリエンテーション UHMキャンパスツアー	9:00〜12:00 講義: Customer Service 講師: Dirk Soma	16:00〜18:00 ウェルカムレセプション	13:30〜14:45 1 Legal Environent of Travel In 講師: Wesly Fong		Lincoln Hall
9月7日(水)		9:00〜12:00 Introduction to the Culture of 講師:Debbralee Hiilani Shibata		13:30〜14:45 3:Management of Service Enter 講師: Laura Gershuni		Lincoln Hall
9月8日(木)		9:00〜12:00 : Management Communication 講師: Marie Kumabe		13:30〜14:45 1 Legal Environent of Travel In 講師: Wesly Fong		Lincoln Hall
9月9日(金)		9:00〜12:00 ings, Expositions, Events and C 講師: Jerome Agursa		13:30〜14:45 3:Management of Service Enter 講師: Laura Gershuni		Lincoln Hall
9月10日(土)	終日 休日					Lincoln Hall
9月11日(日)			12:00〜17:00 ビショップ博物館見学			Lincoln Hall
9月12日(月)				13:00〜16:00 JTBハワイ訪問		Lincoln Hall
9月13日(火)		9:00〜12:00 講義: Customer Service 講師: Dirk Soma		13:30〜14:45 1 Legal Environent of Travel In 講師: Wesly Fong		Lincoln Hall
9月14日(水)		9:00〜12:00 講義: Hotel Sales & Marketing 講師: Dan Spencer		13:30〜14:45 3:Management of Service Enter 講師: Laura Gershuni		Lincoln Hall
9月15日(木)		9:00〜12:00 講義: Resort Management 講師: Ivan Wen		13:30〜14:45 1 Legal Environent of Travel In 講師: Wesly Fong	18:00〜21:00 修了式/夕食 Willow Restaurant	Lincoln Hall
9月16日(金)	8:00 Lincoln Hall出発	10:30 ホノルル出発 NH7025				
9月17日(土)				13:25 成田着 NH7025		

次号予告
2012年9月刊行予定

特集
世界遺産

交流文化

12

2012年2月10日発行

発行人　村上和夫
編集人　大橋健一

デザイン　望月昭秀、木村由香利
印刷　こだま印刷株式会社

問い合わせ先

立教大学観光学部

〒352-8558　埼玉県新座市北野 1-2-26

TEL 048-471-7375

http://www.rikkyo.ac.jp/tourism

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2012 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.

ISBN 978-4-9902598-8-4

筆者紹介（50音順）

佐野浩祥（さの・ひろよし）

観光学部助教

2000年東京工業大学工学部社会工学科卒業、2006年同大学院情報理工学研究科博士課程修了。博士（工学）。立教大学アミューズメント・リサーチセンター PDを経て、2009年4月より現職。専門は国土・地域計画。主な著書に『たのしみを解剖する～アミューズメントの基礎理論』、『都市計画家・石川栄耀』（以上共著）など。

須永和博（すなが・かずひろ）

獨協大学外国語学部准教授

1977年生まれ。立教大学大学院観光学研究科博士後期課程修了。博士（観光学）。専門領域は、文化人類学・観光研究・東南アジア大陸部地域研究。主にタイ北部の山地民カレン社会のあいだで、エコツーリズムや先住民運動・環境運動に関する民族誌的調査を行う。

内藤順子（ないとう・じゅんこ）

観光学部助教

2007年九州大学大学院人間環境学府単位取得退学。日本学術振興会特別研究員（PD）を経て、2011年4月より現職。専門は文化人類学（貧困、開発支援、観光現象）。フィールドはチリ・メキシコを中心とするラテンアメリカおよびスペイン。主な著書・論文に『「境界」のいまを生きる：身体から世界空間へ』（共編著）、『アクション別フィールドワーク入門』（共著）、『支援のフィールドワーク』（共著）など。

2012年度
立教大学観光研究所
公開講座

立教大学観光研究所では、以下の2つの
観光産業の入門的公開講座を実施しています。
学生はもちろん、社会人の方々にも広く受講頂けます。

旅行業講座

「国内旅行業務取扱管理者試験」
「総合旅行業務取扱管理者試験」
のための準備講座
（2012年4月開講7月講義終了）

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実際的な知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容は、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い分野を扱います。

ホスピタリティ・マネジメント講座

宿泊・外食産業の理論と経営、最新動向を学ぶ
（2012年9月開講12月講義終了）

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業を、今日「ホスピタリティ産業」と呼んでいます。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い分野まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。

講座に関する問い合わせは

立教大学観光研究所事務局
（池袋キャンパスミッチェル館）

〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL 03-3985-2577　FAX 03-3985-0279
Email：kanken@grp.rikkyo.ne.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/

立教大学観光学部

観光学科／交流文化学科

立教大学観光学部は観光学科と交流文化学科の2学科体制です。フィールドを世界に拡げ、リアリティに満ちた学びの場を提供するオンリーワンの観光教育を目指します。

立教大学観光学部
〒352-8558
埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

http://www.rikkyo.ac.jp/tourism